

晴 曇

群青の空を染めぬき日章旗鳴りはためくも強き北風に  
血も臭はむ戰場に兄の立ちませる幻の見ゆ秋の月の夜  
言の葉のふと止絶へたる一瞬にこの大いなる哀しみは來ぬ  
酷寒は戦場の土も裂くといふ現身の兵は何程ならむ

×

薄日洩る机に寄りて我が心書かむとすれば想ひのみ充つ  
假名文字の母の便りを判じ讀む眼はいつか涙溢れし  
鉛筆の指先をもて幾夜經つしたゝめしならむこの母の便り  
晴曇の變りはげしく幾日かこもらひつ降る霜月の雨  
話しすればそれぞれと言葉みな重き響をもてる霧海の夜  
朝露に重くしとりて庭狭に大輪の菊は交々咲けり  
かゞよへる花瓣の露もふるゝかにかうべをよする黄菊と白菊  
秋日照る道に幼な兒は糸もちて落ちし紅葉を刺し重ぬるも

後 藤 康 信